

情報要求の場面における日本語母語話者と 中国人日本語学習者の言語行動

フイ ハーリン
許 夏玲

東京学芸大学留学生センター

1. はじめに

日常会話においては、話し手と聞き手が交互に情報を要求したり、情報を伝えたり、または情報を確認したりすることでコミュニケーションを行う。ザトラウスキー（1993）では、「情報要求」を「情報の提供を求める発話で、『質問』の類が多い」としている。その例として次のようなものが挙げられる。

(1) 今どこですか？ (ザトラウスキー1993:42)

(2) (あの)、酒あるんですか？ (ザトラウスキー1993:43)

また、疑問文の形式にかかわらず、次のような「～かなあ」の形で話し手自身への情報要求を表すものがある。

(3) じゃあ、う---、あ、テープどうしよう。

あ、どうしようかなあ。 ← (自己への情報要求) (ザトラウスキー1993:24)

これまでの研究では、何を「情報要求」と定義するのか、相手に情報を要求する際、どのような表現が用いられるのか、「情報要求」の場面における表現の使用実態についてまだ十分に考察されていないと思われる。また、情報要求の際、場合により、話し手が相手の私的領域に侵入し、相手のネガティブ・フェイス^{注1}を脅かすおそれがあるため、如何に相手との人間関係を友好に維持しながら、相手に情報を求めるかは、言語運用能力を高めるための重要な課題の一つであるといえる。

本研究で言う「情報要求」とは、話し手の知らない情報を相手から提供してもらい、または話し手の持っている情報の不足部分を相手の情報提供により補完できることである。これは、一般に話し手が自分の知っていることを念のため、相手にもう一度確かめる「確認要求」とは違うのである。「確認要求」の例として次のようなものが挙げられる。

(4) JJ2 (親)

91	J1	**	<笑い>	<笑い>
92	J2	私も ** 間に合わない	間に合わないけど<笑い>	だって一日に間に合わそうとしても 1日に間に合う

^{注1} ネガティブ・フェイス(negative face)は、他者に邪魔されたくない、立ち入れたくないというマイナス方向に関わる欲求である。これに対し、ポジティブ・フェイス (positive face) は、他者に理解されたい、好かれたい、認められたいというプラス方向に関わる欲求である。(Brown & Levinson 1987)

93	J1	そう そうそう わかるわかる わかるわかる なんなら
94	J2	期間があるじゃん この日までにだせば絶対 その日に書いてもダメ<笑い> ぜったいムリ
95	J1	私 1 日に まだ書いとるからね
96	J2	<笑い> え? 出す? なんか こ 私 ま 親に 5 枚 で いいやって 言われ*

上記の例において、年賀状を出す期限が過ぎると、1日に届くのがぜったい無理だという J2 の発話に対し、J1 が1日でもまだ年賀状を書いて出すと言った。それを聞いた J2 が驚いて、もう一度「出す?」と相手に確認したと考えられる。

本研究では、情報要求の場面における日本語母語話者の使用表現および中国人日本語学習者の使用表現を実際の会話データから収集・分析し、両者の表現の使用実態から言語行動の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

2. 調査対象と方法

本研究では、日本語母語話者同士の親疎^{注2}各2組、接触場面の日本語母語話者対中国人日本語学習者の初対面3組、合計7組を対象に、15分間の自由会話、合計105分の会話データを収集した。その後、収集した会話データを文字化した。文字化資料から前述の「情報要求」の定義に当てはまる表現を抽出し、分類・分析を行った。なお、先行文脈に出ていた話や話し手の知っていることを念のため、相手にもう一度確認するという「確認要求」の表現（前掲の例（1））は、本研究の考察対象から除外しておく。話し手の断定的な主張を和らげる形で相手に提示する場合の「～じゃない?」、「確認要求」と「情報要求」の両方の表現とも見なせるものも考察対象としない。

3. 調査結果

3.1 日本語母語話者同士の場合

疑問文は、話し手が相手に何らかの反応を求めるため、上昇調を伴うものが多い。本研究では、上昇調を伴う情報要求の表現を直接的情報要求表現と呼び、上昇調を伴わない情報要求の表現を間接的情報要求表現と呼ぶ。

直接的情報要求表現の場合、親しい間柄と親しくない間柄の日本語母語話者同士では、話し手が相手に何らかの情報を求める際、上昇調イントネーションを伴う疑問語疑問と真偽疑問を多く用いることがわかった。また、疑問語疑問と真偽疑問の全体の半数を占めるのが、「んだ（のだ）」が付いているものである。これにより「んだ（のだ）」が付いている疑問文が話し言葉に

^{注2} 日本語母語話者同士の疎の場合、初対面というより同じ学科の先輩と後輩で、面識のあるまたは名前知っている程度の間柄である。

において多く用いられることが明らかになった。「んだ (のだ)」が付いている真偽疑問は、単に真か偽かを問うのではなく、話し手が相手により多くの関連情報を得るために用いられると考えられる。たとえば、「映画を見に行きますか」と「映画を見に行くんですか」とでは、話し手の問う意図が違うと思われる。

一方、親しい間柄同士は、親しくない間柄同士より上昇調を伴う省略形疑問を多く用いることがわかった。省略形疑問は、くだけた形で表現されるため、共通認識を持っている親しい間柄同士にこそ多く用いられるのではないかと考えられる。

間接的情報要求表現は、話し手が相手に直接質問をするより、一步引いた感じで何気なく相手に情報を提供してもらいたいシグナルを送り、相手からの反応を待つときに用いられると考えられる。

今回、収集した会話データに基づいて間接的要求表現を考察すると、日本語母語話者同士の間では、省略中止、疑似独り言、疑似確認、述べ立てという表現が多く用いられていることがわかった。その中で、親しい間柄でも個人のプライバシーに触れた話題、または親しくない間柄では、省略中止が多く用いられる傾向が見られる。たとえば、親しくない間柄同士の会話には、例 (5) のような省略中止があった。

(5) JJ5 (疎)

279	J1	今だったら3年生 ですかね?	あ 入ってきた 1年生の世話は
280	J2	3年生 いち 入ってきた1年生をこう し お世話するのは	うん
281	J1	2年 ですか	うん そうです
282	J2	あそう なんだ	

一方、推量を表す「だろう」を用いた「なんでだろう (ね)」「どうしたんだろう (ね)」のような独り言は、親疎にも関わらず、日本語母語話者同士の会話に用いられることがあることがわかった。しかし、これらの表現のうち、相手のことを意識しながら、相手に間接的に情報を要求するといった意図で発するものがある。本研究では、前後の会話文脈を考慮に入れ、情報要求の意図に沿ったものを「疑似独り言」と呼ぶ。疑似独り言は、話し手が相手に情報源がないかもしれないと予測し、相手に直接質問をするより、あたかも自分に話しかけているように見せかけ、そこで相手がもし何らかの情報を持っていれば、提供してくれるだろうと期待するときに用いられると考える。次の (6) のような表現はその例である。

(6) JJ1 (親)

224	J2		え なんか でもこないだ
225	J1	<笑い>	例の彼 えても
226	J2	言ったら【なまえ】が触れないであげてって言 ってたけど<笑い>	どうしたんだろうね結局

227	J1	戻ってきちゃうからね	【なまえ】はさ 韓国行くの?
228	J2	うーんうん 続けていくのはけっこう大変だよ ね いくら近いと いっても	え?

今回の収集した会話データでは、親しくない間柄同士が親しい間柄同士より疑似確認の表現を多く用いたことがわかった。疑似確認のうち、「～ったけ」は話し手が相手のことを知らない（ほとんど覚えていない）のにも関わらず、あたかも自分が相手と共有認識を持っているように話しかけ、相手から情報を得ようとするときに用いられる。次の例（7）を見てみよう。

(7) JJ6 (疎)

216	J2		0.5 秒	【なまえ】さんつ
		て		
217	J1	あ東京の八王子です	<笑い>	高校は
218	J2	どこ出身だったっけ?	あー 八王子なんだ	え?高校はどこだったの?

3.2 中国人日本語学習者の場合

初対面の接触場面においては、中国人日本語学習者の発話数が日本語母語話者より少なかった。直接的な要求表現の場合、中国人日本語学習者と日本語母語話者では大きな違いが見られなかった。間接的な要求表現の場合、中国人日本語学習者が省略中止と述べ立ての表現しか用いなかった。

中国人日本語学習者が相手に直接質問をするのではなく、自分の意見を述べ立てることにより、相手に「そうだ」「そうではない」という返事を促していると考えられる。述べ立ては、話し手が相手に相手への理解を示し、仲間意識を共有していることを表すときに用いられると考えられる。中国人母語話者同士の会話でも述べ立ての使用が多く見られる。これは、中国人母語話者が相手と意思の疎通をはかるために、自分の意見や主張をよく述べるからであろう。(紙幅の都合により、用例についての説明は口頭発表で行う予定である。)

4. 今後の課題

今後、中国人母語話者同士の会話および韓国人母語話者同士の会話、接触場面での日本語会話から情報要求の表現を考察・分析し、日本語教育の会話指導に役に立てる助言を提案したい。

参考文献

ポリー・ザトラウスキー(1993) 『日本語の談話の構造分析』 くろしお出版

Brown & Levinson.1987. Politeness: Universals in language usage. Cambridge University Press.